

地域志向型教育と連携し異世代コミュニケーション 能力育成をはかる 初年次教育の一事例

澤 達 大

1. 問題の所在

本報告は、総合社会学科における初年次演習で、宇治市高齢者アカデミー生との交流によるキャリア発達を促す授業実践の一事例を紹介するものである。

本学で、文化人類学科と現代社会学科が総合社会学科に統合され、1学科5コース制が導入されてから6年が経過した。筆者は2年目より初年次教育や高大接続教育のコーディネーターとなり、その中で、従来のプログラムを引き継ぎつつも、担当教員からの声を基に改訂を加え、試行錯誤をしながらさまざまな取り組みを行ってきた。主に実施した事項は、下記のとおりである。

○入学前学習…対象生徒をAO・特別推薦による入学者だけでなく全入学予定者とし、実施時期を12月上旬から3月中旬に変更。さらに、半日であったプログラムを1日の実施として、グループ活動を中心とした。昼食時の友人作りとともに、転換教育として小論文作成課題に取り組んでいる。

○初年次演習…コースごとに任せられていたプログラムを5月上旬まで学科で統一し、大学での学び基礎をすべての学生が確実に実施し定着するために、ブレインストーミングや図書館講習などを実施している。

ところでそのような取り組みの中で、筆者が抱いた疑問は次の2つである。

- ①本学科のカリキュラムポリシーでは、「問題発見や問題解決に向けた調査・分析力、またコミュニケーション力や情報発信・表現力などを養うため、少人数クラスによる演習・実習等の実践的な科目を設定する。」とある。しかし、コミュニケーション力を育成するためのプログラムが、学生の間だけのコミュニケーションに留まっているのか。また、コミュニケーション能力を育成すると言いながら、その力は中高時代に培われたものに頼り、大学での育成は自然に身につくものなのか。
- ②就職活動では異年齢の人と接することが多くなるため、インターンなどは重要であるが、2年次生からの現場実践科目等で現場の人といきなり会うので良いのか。初年次教育でできることはないのか。
- ③初年次演習は、果たして本学の目指す地域指向型教育にどの程度貢献しているか。

③について補足すると、本学は、2014（平成26）年度から、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC=Center of Community 事業）に採択された。この事業は、大学が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としたものである。

さらに「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（COC＋事業）にも採択され、地元自治体や企業等と協働して地域が求める人材養成のために必要な教育カリキュラム改革に加え、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることが求められるようになった。京都府南部地域（宇治市以南）に本拠を置く唯一の大学として宇治市、京都市伏見区と連携し、地域全体で学生、教職員、地域住民が共に学び合うことが求められてきている。全学共通科目として1年次後期に「地域入門」が新設され、「地域インターンシップ」などの地域志向型の科目には、毎年、多数の学生が応募している状況である。（本学の場合、COC採択前から現場実践を重視しており、フィールドワークなどを通じて現場での調査やインタビューなどをする機会は多く、地域志向型教育の素地は存在していたといえる。）

ところで多くの大学では現在、インターンなどの機会を通じて学生を企業等の社会の現場に送り出している。しかし、前述の②の疑問のように、その前提となる学生と異なる年齢層の人々とのコミュニケーションスキルを育成するプログラムは、果たしてどのくらいあるだろうか。

本学でも以前、フィールドワーク等でのインタビューを適切に行えるようにするため、対人コミュニケーション育成のためのプログラムが存在していたが、学生同士での質問や傾聴程度に留まっていた。また、ボランティアやインターンで現場に出る前に、それぞれの授業時に現場の方を呼ぶ機会はあるものの、あくまでも直前の指導であり、内容も1対多数の学生であるため、中高におけるゲストスピーカー招聘と同じであり、異世代間のコミュニケーションスキルを磨くには足りないと思われる。

スマートフォンやSNSの普及により、学生はインターネットを通じて同年代でも気の合う限られた集団の中でしかコミュニケーションをとらない傾向が見られる。ま

た、多くの大学等において、家族、友人などの対人関係に関する学生相談が増加しているのは、周知の事実である。さらに、家族間ですらLINEで連絡をとることが増えている現在、異世代間のコミュニケーションの機会を大学が積極的に創り出すことは、学生の成長に有益と考えられる。

異世代間コミュニケーションの機会として、宇治市高齢者アカデミー生との交流による教育効果をねらいとして、本授業を実践した。

2. 学生の異世代間コミュニケーションスキル育成の現状

授業実践にあたり、大学生のコミュニケーションスキル育成の中で、異世代間、特に大学生と社会人や高齢者との交流に関する先行研究について調査した。その結果、次の①～③の傾向が見られた。

①学生との交流によって得られる効果について高齢者を中心に論じた研究

福田（2015）は、生命健康科学部学生と地域の高齢者の双方における世代間交流や生活支援のニーズを明らかにすることを目的として調査している。学生が高齢者の住宅へ訪問する交流であり、大学キャンパス内での実践ではない。

②看護系や保育系、教育系などの目的養成学部的大学生が高齢者と交流の実践

権 他（2018）は、保育者を目指す大学生が地域での世代間交流活動を通してその意義と課題を検討した。「笑話浪漫サロン」での世代間交流活動が自らのコミュニケーション能力の高める機会として有意義な活動になっていることを明らかにしている。将来の職業に直結して、コミュニケーション能力を高める効果はあるものの、本学の学生の実態にはやや離れている。

③体験的施設や行事、催しなどをきっかけにした異世代間交流の実践

桜井（2016）は、キャンパス敷地内で野

業と世代を超えたコミュニティを育てる畑として「コミュニティ・ファーム」を運営する実践で、学生の成長が見られることを明らかにしている。非常に興味深い実践であるが、類似する異世代間交流の実践は数多くあると考えられる。また、初年次の学生全員が経験するプログラムではないため、教育効果は参加する一部の学生に限られるものとなっている。

以上の結果、学科全員の学生に初年次教育の一環として高齢者との交流を少人数の形でとることは、先行事例がほとんどないであったことが明らかになった。その意味でも今回の実践は先行的、さらに挑戦的な取り組みといえよう。

初年次教育の在り方に関する先行研究として、豊田（2016）の報告は注目したい。それによると、初年次教育は、大学のユニバーサル化に伴う「学力が低い、学ぶ意欲・動機の弱い学生」の増加に対応したものであり、入学当初に新たな教育機会を提供し、その後の教育効果が高まる下地を作ることであるとしている。その中で、「読解・文献購読の方法」「ノートの取り方」という知識・スキル習得型の内容のものは、マイナスの成果を誘発している可能性があり、反対に成果につながっているものとして、「大学教育全般に対する動機づけ」と「市民としての自覚・責任感・倫理観の醸成」を挙げている。本プログラムは成果につながる「良質な経験」とも捉えることができる。

大学生による異質な相手との対人関係形成に関する研究として興味深いのは、田中・高濱（2012）による研究である。学生が高齢者等の異質な相手との対人関係形成にどれほど困難を感じ、その原因認知をどうとらえているかについてまとめている。それによると、学生は高齢者等に対し、無関心や拒否ではなく、話しかけるきっかけがつかめなかったり、話し方がわからなかったりして、うまく話せるか不安に思うた

めに、交流が滞っているとしている。学生は高齢者との交流が嫌というわけではなく、心の中では関心を持ちながらも、受け入れられないことを心配し、何をどうやったらいいかわからず、具体的な交流には踏み出せない状態にある。さらに学生は、高齢者の話の長さを警戒するなど高齢者のステレオタイプ的な特徴をあげて困難を予測しているが、交流スキルを知りたいとも答えていることを明らかにした。このことからも世代間ソーシャルスキルの必要性和、大学がその機会をつくることが重要と思われる。

3. 宇治市高齢者アカデミーとの連携

（1）高齢者アカデミー事業の概要

ここで、宇治市高齢者アカデミー事業について簡単に説明しておきたい。本事業は、本学と宇治市が連携し、地域社会に貢献する人材養成を目的に、2013（平成25）年9月より開講しているものである。生涯学習の一環として、宇治市在住の65歳以上の高齢者を対象に、学習機会を提供している。それにより高齢者の社会参加、生きがいづくりに寄与している。

アカデミーは、秋学期入学の2年制であり、①週1回の科目履修、②月1回程度のグループワーク（アカデミーアワー）を行っている。①は、現役学生（短大を含む）と一緒に専門的な科目として、4つの科目群「生きる・暮らし」「国際・教養」「社会・経済」「心理・福祉」（約130科目）から、1学期1科目を選択して履修している。また②では、月1回のアカデミーアワーと称し、自主企画や特別講義、グループワークなどが行われている。

筆者は2017年度入学の5期生の担任となり、高齢者アカデミーとの関わりを深く持つようになった。その中で、もっと学生と話をしたいという希望を持つアカデミー生が多いことに気づいた。開設科目には、グループワーク等のいわゆるアクティブ・ラ

ーニングを積極的に行う授業や、最終授業で学生と懇談の場面を設ける授業などがある。そのような授業を履修した場合は学生と話す機会があるものの、多くの場合は懇談の機会に恵まれないとの声が多かった。そのような受講生の声を生かすことも、この取組みの目的の1つである。

(2) 学生との懇談会 授業実践の流れ
具体的な授業実践は、下記のとおりである。

[手続き]

- * 学科会での企画承認
- * 高齢者アカデミー生へ募集案内
(定員を上回ったため、人数を微調整)

[授業] 「初年次演習」第3／4回

※クラスを半分に分け、図書館講習と同時進行により実施。

(図書館講習は図書館職員とSAの学生が担当)

<導入 10分> 諸注意・アカデミー生紹介

宇治市高齢者アカデミー 5期生の皆様	総合社会学科 初年次演習担当(澤)
「総合社会学科学生との懇談会」 参加希望書	
<p>時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。</p> <p>総合社会学科では、本年度243名の新入生を迎えスタートしました。つきましては高校を卒業したばかりの大学1年生との懇談会を下記のとおり計画しております。初めての企画のため、不行き届きもあるかと思いますが、ふるってご参加いただければ幸いです。</p> <p>ご協力いただける方は、別紙でお申し込みください。どうぞよろしくお願いいたします。</p>	
記	
目的	①本学には宇治市と連携して「高齢者アカデミー」の制度があることを知る。 ②アカデミー生の皆さんがどのような思いで学んでいるかを理解する。 ③アカデミー生の皆さんの社会での現役時代の話や、現在取り組まれていることなどの話を聞くことで、学生たちのキャリア形成につなげる。
日時	4月19日(木) 3限(13:00~14:10) 4月25日(水) 4限(14:40~15:50) 4月26日(木) 3限(13:00~14:10) 5月11日(水) 4限(14:40~15:50)
概要	1. 教室にアカデミー生・学生が集合して、澤から全員を紹介します。 2. 小グループに分かれて懇談を始めます。 3. 授業終了の20分前に懇談を終え、学生は振り返りシートを書きます。
<懇談で期待される内容> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div> * 社会で働いていた時代の話 * 現在、取り組んでいることの話 その他、学生が聞いて有用な話が望ましいです。 </div> <div> * 昨年度秋学期に受講した科目の話 * 現在の社会情勢に関する話 </div> </div>	
<お願いしたいこと> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div> * 怒らない * 一方的にしゃべらない 懇談中に担任との面談が入るため、学生は順番に10分ほど中座します </div> <div> * 法律違反の武勇伝は話さない </div> </div>	
懇談をご希望の方は、別紙にてお申し込みください。なお、希望人数が多い日については、人数調整の上、ご連絡させていただきますので、ご容赦ください。	

図1 アカデミー生への懇談会依頼書



写真1 懇談会当日のようす

＜懇談 50分＞ 4～8名程度の懇談

内容：テーマを設けずフリートークで実施

＜まとめ 10分＞グループ懇談の紹介

＜振り返り 10分＞移動・シートの記入

今回は内容をフリートークとしたが、春学期の振り返りアンケート調査では、次のようなことをテーマにしたという報告があった。

- * 海外での活躍と語学について
- * これまでの経験（職業等）
- * 大学生活の激励（学び・友人・思いやり・忍耐・英語力等）
- * 経験の重要性、若い頃しかできないこと
- * 自分の若い頃（高度経済成長期の日本）
- * 「TEFCAS 思考法」と幸せの4つの因子（やってみよう・ありがとう・何とかなる・私らしく）をみんなで考えた
- * 高齢者アカデミーで選択した科目
- * 人手不足の時代に生き残るために
- * 社会人になってからの心構え
- * 年老いるまでの体力維持方法

アカデミー生の中には、海外赴任や人事担当等で活躍していた方もおり、学生たちにとって非常に刺激のある話もあったのはいうまでもない。

5. 授業実践の考察と今後の課題

授業後の学生への振り返りシートや、アカデミー生の事後アンケートの結果を精査すると、学生とアカデミー生の双方が、今回の企画に「概ね満足」している状況が見られた。

ただしアカデミー生に「懇談会後に学生と話す機会があったか」という質問については「ない」という回答が多く、この懇談会はやや一過性のものであったことは否めない。

図2の振り返りシート内にあるループリックでは、ほとんどの学生が4または3を付けているため、数値的な評価に関するデータの有効性がないと判断し、本稿では掲載しない。一方で振り返りシート内に書かれた5名の感想は、懇談会で得たものが多かったことを物語るものと考えられるので、ここで紹介したい。

学生A：なかなか年齢の離れた方と話をするという機会がないのでとても聞いていて楽しかったです。今までどういう風に過ごされていたのかという話を聞き、目的を持つことは大切だと感じました。目的があるから挑戦することができるのではないかと話を聞いていて思いました。また、「若い人には皆、挑戦心があると思っているかもしれないが、意外と保守的だったり年をとっても挑戦的だったりする」ということを聞き、見た目ではわからないと、また面白いと思いました。

学生B：私たちが質問したことも親身に答えてくださり、本当にうれしかったです。大学でのアドバイスもいただくことができました。ぼーっとする時間をなるべく減らし、興味があることはすぐ行動してみる大切だと教えていただきました。アメリカに行っていたときの話も面白かったです。

総合社会学科 初年次演習					
振り返りシート（第3／4回授業）					
本日の授業を振り返り、下記の事項を記してください。					
1. 本日の授業（大学の学び 高齢者アカデミー生の皆さんとの懇談）を受けたあなたの状況について自己評価をしてください。 ※表の右の太線部分にあてはまる数値を書いてください。					
評価のポイント	レベル4 大変よくできた	レベル3 よくできた	レベル2 あまりできなかった	レベル1 できなかった	評価
傾聴	アカデミー生の話を積極的に聴き、共感することができた。	アカデミー生の話を興味をもって聴き、内容が理解できた。	アカデミー生の話の内容を覚えているが興味がわかなかった。	アカデミー生の話に興味を持てず、内容を思い出せない。	
質問	懇談の中で質問をすることができた。	懇談の中で質問ができなかったが、質問を考えながら聴いた。	懇談の中で質問をしなかったし、質問が思い浮かばなかった。	懇談に興味がなく、質問しようとは全く思わなかった。	
協力	クラスメンバーと協力して楽しく懇談を進めることができた。	クラスのメンバーと協力して懇談することにはできた。	クラスのメンバーとの協力はややできなかった。	メンバーがばらばらで懇談が上手くいかなかった。	
人間関係の構築	年齢の異なる人とも短時間で人間関係を築ける自信がもてた。	今日の懇談で年齢の異なる人と接するのが苦手でなくなった。	年齢の異なる人との懇談に慣れなかったが次は頑張る。	年齢の異なる人と話せないし、話すことに興味が無い。	
2. 本日の授業の感想を書いてください。					
<hr/> <hr/> <hr/>					

図2 学生の振り返りシート

学生C：他の授業でアカデミー生の方をよく見ていて、話してみたいなと思っていたので、今日の授業はとても楽しみにしていました。「お金はモノを買うためではなく自分を高めていくために使う」という言葉が印象に残りました。また、何度も学校を卒業していると聞いて、時間があるといっても意欲があってからこそできることだなあと感じました。私も自分を高めるためにお金を使おうと思いました。

学生D：話を聞き、人付き合いというのは非常に大切だと思った。人との関係を続けなくても生活に支障はないが、やはり続けられる人と続けられない人とは違いが出るとおっしゃっていたので、将来大人になっても仲良くいられるような関

係を作っていきたいと思った。あとこういう話を聞くと久々に地元の友達にも会いたくなった。

学生E：祖父母がおらず、普段、高齢者の方と話す機会がないため、この授業は大変貴重な経験になった。なかなか友人と呼べる人ができず悩んでいることを相談したところ、「無理に作ろうとせず気が合う人と長く付き合いなさい」という言葉をいただき、もう少し根気強く頑張ってみようと感じた。今やっていることがどれだけ将来につながるかを教えていただいたので、今後の大学生活に役立てようと思う。

筆者が今回の実践を総括すると、高齢者と学生の接点をもつ企画としては良かった

が、効果については計測不可能な状況と考えられた。それは、この授業があくまでも即効性のある効果は求めてないからである。数年後になるか数十年後になるかは不明であるが、いずれにせよ高齢者アカデミー生という人生の先輩の言葉が身にしみてわかる時がくることを願っている。

今回の実践では、担任教員との面談の空き時間の有効活用という目的もあったため、時期的には入学したての学生で時期尚早であったかもしれない。時期的には前期の終わり頃の実施も検討し、学生の動機づけも充実させる必要があると思われる。ただし、4月下旬に実施した理由は、学生全員がまだ「大学生かぶれ」せずに話を聞ける状況にあると判断したからで、今後の検討材料ともいえる。

一方で、発表者が教室で全クラスを観察する中では、コースごとに成果の差が見られた。特に「観光・地域デザイン」「メディア・社会心理」コースは、懇談時の積極性や充実ぶりが見られたが、コースによっては、懇談に集中力を欠く学生が多い傾向が目立った。この仮説として、どちらかといえば職業選択を先延ばしして進学し、目的意識や学習意欲がやや低い学生がコースによっては集まる傾向があると考えられる。この点は本学科の抱える課題の一つといえよう。

注

本稿は、澤達大（2018）「地域指向型教育の中の初年次教育の一事例—京都文教大学総合社会学部における初年次教育実践報告—」（初年次教育学会第11回大会発表要旨集，pp. 154-155.）を一部加筆・修正したものである。なお、2018年度に酪農学園大学で開催された「初年次教育学会第11回大会」は、9月6日未明に発生した平成30年北海道胆振東部地震により第2日が中止となったため、発表予定の内容を掲載した。未筆となりますが、この度の地震により亡くなられた方々に、心よりお悔やみ申し上げますとともに被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

<参考文献>

- 福田峰子 他（2015）：大学生・高齢者間の交流・生活支援に対する意識調査，生命健康科学研究所紀要，(11)，pp. 73-78，中部大学生命健康科学研究所。
- 権泓珠 他（2018）：地域での世代間交流活動の参加経験が保育士を目指す大学生の認識に及ぼす影響 —本学学生による「笑話浪漫サロン」の実践を通して—，岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 地域協働研究 (4)，pp. 39-48。
- 桜井政成（2016）：キャンパス・コミュニティ・ファームを通じた世代間交流の可能性：大学生が三世代交流に関わることの意義・影響，立命館大学地域情報研究所紀要 (5)，pp. 119-132。
- 豊田義博（2016）：「良質な経験・学習」をもたらすもの・阻害するもの Works Review Vol. 11，pp. 20-33。
- 田中共子，高瀨愛（2012）：大学生における対人関係形成の困難に関する原因認知：高齢者、子供、外国人、社会人、学生との関係について，文化共生学研究，(11)，pp. 35-44。